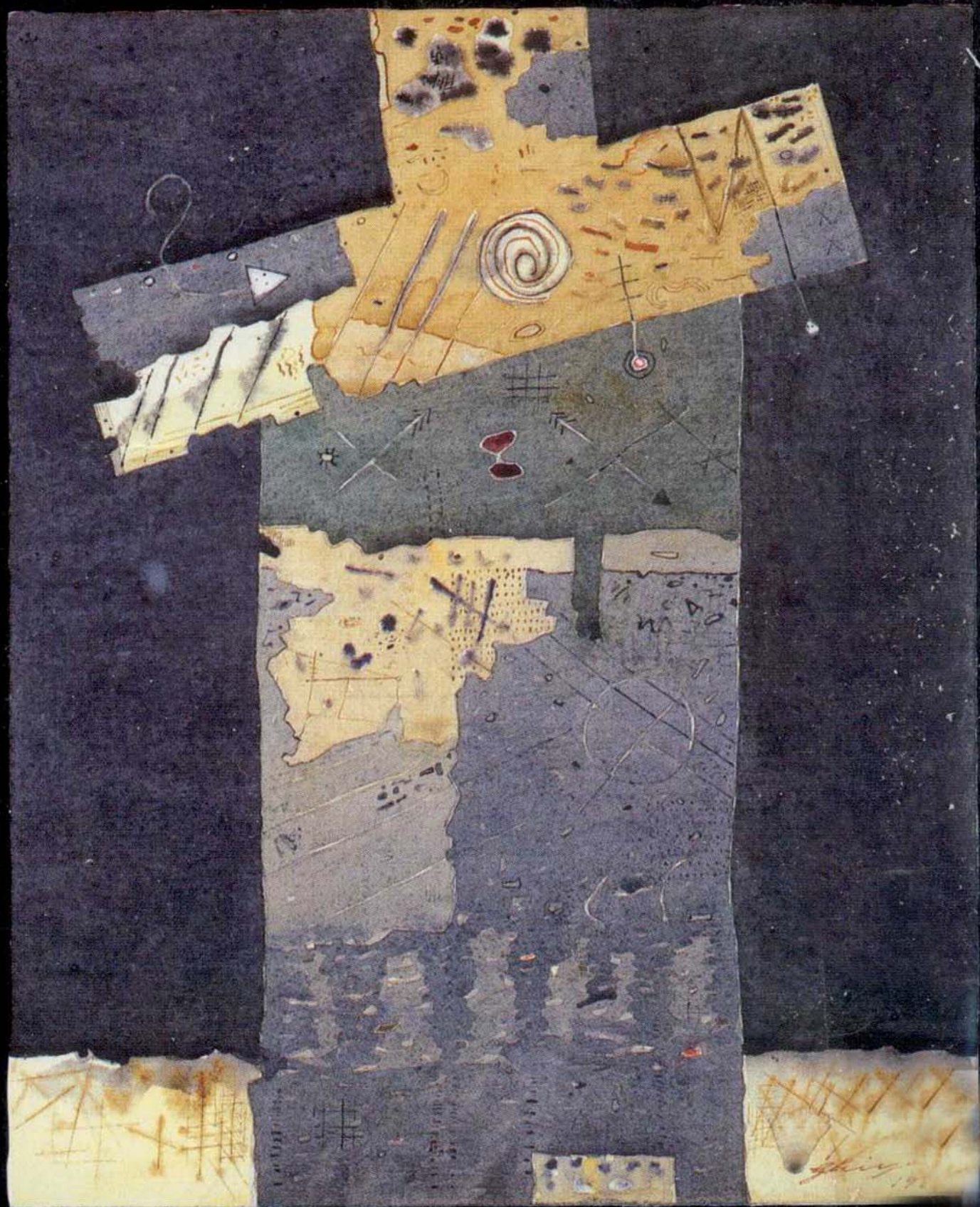


遠い日の戦争

吉村 昭



新潮文庫

とお　　ひ　　せん　　そう
遠　い　日　の　戦　争

新潮文庫

よ - 5 - 16

昭和五十九年七月二十五日 発行
昭和六十二年四月三十日 三刷

著　　者　　吉　村　昭
 よしむらあきら

発行者　佐藤　亮　一

発行所　株式會社　新　潮　社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六一五一
 編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛で送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所

© Akira Yoshimura 1978 Printed in Japan

ISBN4-10-111716-0 C0193

新 潮 文 庫

遠い日の戦争

吉 村 昭 著



新 潮 社 版

3227

遠い日の戦争

—

少年の眼は、琢也たくやに向けられることはなくなっていた。

列車が揺れると、白癬しらくものひろがった少年の頭部が琢也の体と前に立つ中年の女の体の間に埋れ、その度にかれは体を後へ引き、少年の呼吸するわずかな空間を作つてやる。少年は、しばしば琢也の顔を見上げる。その眼には、大人たちの肉体の中で自分が無力であることを知った深い諦めあきらの色と、体を引くことを繰返している琢也にすがりつくような光がうかんでいた。が、そのうちに少年は仰向くことにも疲れたのか顔を伏せ、頭部が埋れる時にわずかに顔を動かすだけになっていた。琢也の前に立つ女が母親らしく、少年が女のモンペの布をつかんでいる気配が感じとれた。

車内には、人の体と荷物が隙間なく詰めこまれていた。座席と座席の間にも人が割りこんでいて、座席の背の上に立って網棚の横木をつかんでいる者もいる。言葉を発する者はなく、幼児のかすれた泣き声が断続的にきこえているだけであつた。

列車が、速度を落しはじめた。交錯するレールの接ぎ目つぎめに車輪の当る音が前方から近づき、車体をふるわせると後方に去つてゆく。その音で、列車が終着駅博多はかたに近づいたことを知つ

た人々の間にざわめきが起った。

琢也は、顔を曲げて窓の外をうかがった。車内の息苦しさから一刻も早く解放されたかったが、市の駅に降り立つことにためらいも感じていた。

列車の動きがさらにゆるやかになり、かすかに揺れると停止した。声が飛び交い、人々の体が激しく揺れ動いた。少年がゆがんだ顔を琢也に向け、もがいている。琢也は、人の体の圧力を押し返しながら少年の眼を見つめていたが、ようやく空間が少年の前に開かれるのを確かめると、座席の間に身を押し入れ、窓からフォームに飛び降りた。

琢也は、フォームを見まわした。駅は七ヵ月前にこの都市を去った時とほとんど変化はなく、所々に焼けたままの鉄柱が立ち、屋根にも鉄骨の梁がむき出しになっている。かれは、人々とともにフォームを改札口の方へ歩いていった。

駅の構内を出たかれは、駅前に板張りの露店が密集し、人々が店の中をのぞきこみながら歩いているのを見た。売子たちの声は活気にみちていたが、歩いている者たちの足取りは重かった。

琢也は、生き残ったかれらの中に顔見知りの者がいることを予想し、闇市からはなれた線路沿いの道を足早に進み、小さな川に架った石橋を渡った。

眼前に、広大な焼跡がひろがった。一夜でこれほど多くの人家が灰に化したという驚きが、あらためて感じられた。

かれは、焼跡の中の道を歩きはじめた。終戦時まで二年四ヵ月過した都会であったが、かれは二度と足を踏み入れることはあるまいと思っていた。この都市に近づくことすら避けたい気持が強かった。

かれが家を出て列車と船を乗りついでこの都市にやってくる気になったのは、三日前に受けとった一枚の葉書が原因であった。

葉書の送り主は、元陸軍中尉白坂肇であった。白坂はアメリカで生れたが、移民の両親とともに開戦前に日本へ引揚げ、私立大学を卒業後入営した。かれは、琢也の勤務していた西部軍司令部隷下の西部高射砲集団に属し、終戦後、英語に精通していることから司令部関係の残務処理班の一員として留まり、連合軍側との連絡事務に従事していた。葉書には、近近のうちに遊びに来て欲しい、久しぶりに会いたいと、かれ特有の活字に似た几帳面な文字が記されていた。

琢也は、葉書を手に戸惑いに似たものを感じた。白坂とは甲種幹部候補生時代の同期であったが、親しい間柄ではなかった。むしろ琢也は、時折りみられる外国育ちらしいかれの言動に、嫌悪すら感じていた。白坂もそうした琢也の感情を敏感に気づいていたらしく、近づくことを避けている風があった。白坂は、甲種幹部候補生の教育期間中、敵国アメリカで生れ育ったことから特殊な扱いを受け、言葉に妙な抑揚があることを詰られたりしてしばしば制裁をうけたりしていた。琢也はそれを当然のことと考え、小気味良くも思っていた。かれ

は背も高く、肉付きもよかった。それは将校として好ましい肉体的条件であつたが、それがアメリカの豊かな食物によつて形作られたことを思うと、日本人に対する背信のようにも感じられた。

白坂は、司令部の防空作戦室主任参謀の命令で、撃墜されたアメリカ爆撃機ボーイング B 29 からパラシュート降下し捕えられた搭乗員とうじょういんの訊問じんもんに、通訳として立ち合つた。同席した琢也は、かれの流暢な会話に驚いたが、同時にかれに対する反感をつのらせた。かれの口から淀みなく流れ出る英語は、琢也が学生時代に習つたものとは異質のもので、ほとんど意味はつかめなかつた。その発音に、琢也はアメリカで過した歳月がかれの内部に大きな比重を占めていることを知り、搭乗員と自然な態度で会話を交すかれに警戒心すらいだいた。かれは、肩をすくめたり口をつぐんだまま頭をふったりし、降下兵は、かれに救いを求めるような眼を向け、なにか低い声で訴えたりしていた。

白坂に対する感情は、別れた後も変りはない。二度ほど眼にした日系米兵の通訳の尊大な態度が、かれの印象と重り合う。白坂は、恵まれた会話力を利して米軍と親しく接し、日系米兵の通訳に準じた不自由のない日々を送っているにちがいないと想像していた。

葉書を寄せてきた白坂の真意が、つかみかねた。琢也は、短い文章の背後にひそむ意味を探った。郵便物は、連合国軍が進駐後、すべて総司令部情報局の手によつて検閲されていたが、殊に旧司令部の残務処理班員から出される書簡類はきびしい監視にさらされているはず

であつた。それを知りながら白坂が親しくもない自分に久闊きゆうかつを叙す悠長な葉書を送つてきたことは、緊急に会うことを望んでいる意味にも受けとれた。通訳であるかれは、連合軍側の動きを察知できる立場にあり、自分に関する情報を得て、それを伝えようとしているのではないかとも思えた。

琢也は、葉書を何度も読み返して思索した末、残務処理班のおかれた福岡市に足を向けた。

琢也は、春の陽光を浴びながら道を進んだ。

路面には激しい火熱で生じたこまかい亀裂が走り、アスファルトが欠けて土の露出した箇所もある。道の両側には焼けトタン、瓦礫がれきがひろがり、コンクリート造りの角ばった建物の残骸や土蔵が点々と立っているだけであつた。

七カ月前の印象と異つて、その地はすでに焦土としての落着きをみせていた。残焼物が土に帰しはじめているのか、それとも突起物が除去されたのか、広大な焼跡は平坦で、陽炎かげろうにゆらいでいる。時折り風が渡ると、焼けトタンの鳴る音が近づき、道を越えた地域に去つてゆく。焼跡は乾き、道路には所々に砂礫の吹きだまりがあつた。

いまわしいものが、南の方角に見えていた。東西に峯みねの分れた低い山で、なだらかな山肌は濃い緑におおわれている。晴天の日には遠く壱岐いき、対馬つしままで望むことのできる市の景勝地で、聖武天皇時代に清賀という僧が山中に寺を開き、木の実をしばって油を作ったことから

油山と呼ばれている。琢也たちがパラシュート降下したB29の搭乗員を連れて行って処刑したのは、山麓さんろくにある火葬場に近い雑木林の中で、その折の記憶がこの都市に対する印象と密接にむすびついている。

かれは、海の方角に視線をそらせたが、海浜を走る国道を米軍のトラックが四台つらなつて走っているのがみえた。砂埃すなぼこりが舞い上り、ヘッドライトのまばゆい光が揺れてゆく。昼間もライトを点じて走るのは、アメリカ軍が物資の豊かさを誇示するためだと言われているが、たしかにその光芒こうぼうは威圧的であった。

前方に、望楼の突き立つ消防署の焼けた建物が近づいてきた。建物は素焼の陶器のように白くざらついてみえ、側壁はくずれ、ガラスのない窓の鉄枠てつわくは錆びて垂れていた。

建物の角を曲った琢也は、思いがけぬ花の色を眼にして足をとめた。緩い上り傾斜の道の上に旧司令部の木造二階建の建物が立ち、附近一帯に桜の花がひろがっている。乾ききった焼跡を歩きつづけてきたかれの眼には、高台をおおう桜花が奇異なものに映った。司令部の建物は、桜の花につつまれているためか、いかめしい印象はなく瀟灑しょうしゃな洋館のように見える。高台が、時の流れと無関係な地のように感じられた。

琢也は、建物の周辺に視線を走らせた。船に乗り列車にゆられている間、かれの胸には白坂に対するかすかな疑惑も湧わいてきていた。連合国軍側と接している白坂が、かれらと司令部残務処理要員の域を越えた親密な間柄になっていることも容易に想像された。白坂が自分

に葉書を送ってきたことは連合軍側の指示によるもので、自分を誘い出す手段ではないかとも思えた。が、そのような危懼^{きぐ}をいだきながらも琢也がこの都市にやってくる気になったのは、たとえ最悪の場合でも事態が急迫しているはずはないと推測できたからであった。

すでに、前年の十一月中旬頃から新聞紙上に、外地で俘虜^{ふりょ}虐待のかどによって逮捕された者が軍事法廷でつぎつぎに極刑の判決を受けていることが報道されていた。もしも自分に対する嫌疑が深まっているとしたら、当然連合軍司令部の指示をうけた日本の警察機関によつて捕えられているはずで、たとえ白坂の葉書が連合軍側の指示によるものであったとしても、簡単な事情聴取にすぎないのだろうとも予想していた。

それに、琢也には自分たちのとつた行為がかれらに気づかれるはずはない、という確信めいたものもあつた。それは、民間人の眼にふれることなく慎重に仕組まれ、内密に処理された。強固な軍隊組織の内部でおこなわれたことが、外部に洩れるとは思えなかった。もしも発覚すれば、司令部内の者たちは多少の差はあつてもその事実に関与していて、ほとんどすべての者が連坐する結果になり、それを避けるため互に緘黙^{かんもく}を守りつづけるにちがいがなかった。

琢也は、高台を見つめた。旧司令部の建物の周辺にも高台の中腹に刻みつけられた道にも、ジープや人の姿はない。高台は、森閑としていた。

かれは、高台に視線を据えながら歩きはじめた。坂の傍^{そば}に水道の曲った鉛管が突き出てい

て、水が路面を流れ下り、土の露出したくぼみに溜^{たま}つて、そこから扇状にひろがっている。くぼみにはかすかに水苔^{ケコケ}が湧き、底には洗いぬかれたような砂粒が光っていた。

坂をのぼり、石畳をふんで建物の前に立った。花は満開を少し過ぎているらしく、建物の周囲に花卉が散り敷いていた。

受付には人もいず、建物は無人のように物音一つきこえないが、板壁に御用の方は二階へと書かれた藁^{わら}半紙^{はんし}が、同じ趣旨の英文タイプされた紙と並んで貼^はられていた。

琢也は、眼の前に伸びた廊下を見つめた。窓ガラスはほとんどなく、板が打ちつけられている個所もあって、暗い。私室に使用していた部屋は廊下の奥の左側にあるが、足に向ける気はしなかった。

階段をあがると、二階には明るい陽光があふれていた。白壁に矢印のついた紙が貼られ、かれは、その方向に進んだ。司令官、参謀長室のあった区劃^{かく}で、残務処理班はそれらの部屋を使用しているようだった。

かれは、入口と書かれた紙の貼られているドアの前で足をとめた。その部屋は、参謀長室と部屋つづきになっている作戦会議室であった。室内に連合軍関係者がいるような不安をいだき、その場に立ったまま気配をうかがった。ドアの内部でかすかに人声がしたが、日本語か英語か不明であった。

かれは、ノブに手をのばしドアを押した。他の部屋から運びこんだらしい古びた机が鉤^{かぎ}の

手に並んでいて、紺色の背広に開襟かいきんシャツの襟えりを出した男と、兵隊服を着た三人の男が机の前に坐っていた。かれらは琢也に気づかずなにか書き物をしているようだったが、顔をあげた背広姿の男が、こちらに視線を向けた。

男は立ち上ると、机の後をまわって近寄ってきた。頭髪を伸ばしているので見ちがえたが白坂で、かれの動きに気づいた兵隊服の男たちがこちらに眼を向けた。司令部に所属していた下士官たちであった。

白坂は、無言で琢也の体を押すようにして廊下に出ると、階段の方に歩き、傍のドアを押して入るようながした。手の動かし方や眼を少し閉じる仕種しぐさが以前には見られなかったもので、かれが連合軍関係者と接しているうちに、いつの間にかアメリカでの生活習慣をとるもどしていることが知れた。

白坂は、ただ一つ置かれた机の向う側に坐り、琢也はリュックサックをおろし戦闘帽を机の上に置いて、かれと向き合って坐った。

「待っていた」

白坂が、言った。軍隊時代は短く刈っていたのでわからなかったが、髪が驚くほど豊かであった。

琢也は、かれの表情から、予測通り葉書が軽い意味で送られたものではないことに気づいた。証拠は確実に消滅させ発覚のおそれはないはずなので、司令部所有の物資か施設になに

か不明の点があつて、それについての質問を受けるのだろうか、と思つた。

「B 29搭乗員のことだが、難しい情勢になっている」

白坂は、机に肘をつき両掌を顎の前で組み合わせ、元陸軍中将の司令官、参謀長、元大佐の主任参謀が連合国軍総司令部米軍情報部の取調べを受けていると言つた。

琢也は、思いがけぬ白坂の言葉にかれの顔を見つめた。

かれらが出頭命令をうけて拘禁されたのは一ヵ月近く前で、訊問の内容は、アメリカ爆撃機ボーイング B 29 からパラシュート降下した搭乗員の処置についてであるという。米軍情報部では、ポツダム宣言第十条の俘虜を虐待した戦争犯罪人処罰の条項にもとづいて、日本の防空部隊に撃墜された B 29 の墜落地点、搭乗員の生死を探り、西部軍管区内の九州地区で五十八名のパラシュート降下兵が生存していたことを確認した。それにもとづいて、調査団は日本の民間人から詳細な情報を蒐集し、それらの降下兵のうち十七名が東京方面の俘虜収容所に送られ、その後、四十一名が撃墜された地域の警察署をへて憲兵隊に引き渡され、さらに西部軍司令部に移されたことを突きとめた。

調査官は、かれらの生死について西部軍司令官らに厳しい訊問をおこなつた結果、かれらが全員処刑またはそれに準ずる処置をうけたことを知つた。白坂が口にした難しい情勢とは、司令官らがそれについて命令を下した事実は全くなく、若い将校、下士官らの独断による行為だと主張していることだという。

「信じられぬだろうが……」

白坂は、かすかに頭をふった。

琢也は、呆れたように白坂の顔を見つめた。発覚はせぬという予測が破られた驚きと同時に、司令官をはじめ司令部の上層部の者たちが、事実と異なる主張をしていることが意外であった。

司令官は、支那派遣軍第十一軍司令官時代に在支米空軍の動勢についての情報を豊富に蒐集し、西部軍司令官に転任後、その知識を積極的に活用した。司令官は、増強されている在支米空軍の意図が九州地区に対する攻撃にあると判断し、朝鮮海峡方面を重点的に防空情報網の整備につとめさせた。かれの予測は的中し、九州地区侵入を企てた在支米空軍の爆撃機編隊の動きを事前に探知し、飛行団もその通報にもとづいて完全な迎撃態勢を整え、多数のアメリカ爆撃機を撃墜することに成功した。

その功績によってかれの陸軍部内に於ける評価はたかまり、人格高潔な名将として部下からも畏敬されていた。常に沈着で物に動ずる風がなく、揮毫を求められると死生一如という文字をしたためるのが常であった。そのような司令官が、責任回避の言葉を口にしていているとは想像もつかなかった。

前年の九月五日、琢也は復員者として帰郷したが、その直後連合国側の戦争犯罪容疑者に対する追及が急速に進められていることを知った。